陰翳礼讃　ハバナ旧市街

野谷文昭

ハバナは夏がいい。脳天が痺れるあの暑さは、けだるさと同時に高揚感をもたらす。冬だと凌ぎやすいが、何かが足りない。初めて出会った一九七一年夏のハバナはカーニバルの最中だった。規模から言えばリオとは比べ物にならないが、夕闇の訪れとともに旧国会議事堂前の大通りで繰り広げられた原色のスペクタクルは、今でも目に焼き付いている。

山車が次々とやってくる。そのチームが農業省に属していると、台車を引くのがトラクターだったりする。台車の上のステージでは、こんがり焼けた女性歌手が口を西瓜のように開けてうたい、楽団がこれでもかといわんばかりにボリュームを上げて、豊かなキューバ音楽のあらゆる種類を演奏する。ソン、ルンバ、チャチャチャ、パチャンガ……。パーカッションがさらなる興奮を煽る。踊り手の一団がやってくる。そのとき、チームの一つは、前年逮捕された米国の活動家アンジェラ・デイヴィスに連帯する短調の歌をうたっていた。ここはリオではなく、社会主義国キューバの首都なのだ。

だが眩さに目がくらんだのはこの会場だけで、街はどこも暗かった。今も続く電力不足が原因だ。旧市街の路地に入る。ラジオの放送が聞こえる。外が暗いから窓越しに家の中が見える。しかし手で触れられそうなこの闇が、何とも言えない濃密で官能的な空間を作っている。日本の闇は密度が足りない気がする。誰かを呼ぶ声が響く。少年の声だ。それに応える声が石造りの建物や敷石に反響する。革命以前は繁華街をけばけばしく彩っていたネオンの類が一切ない。だから闇が純粋なのだ。僕は見知らぬ街で迷いそうになりながら、不安を感じるどころか、いつまでもその闇のなかに身を浸していたいと思った。この国の代表的作家カルペンティエルが「柱の街」と呼んだ旧市街。植民地時代の古びた建物が、夜になると生き返り、往時と同じ影を作る。時間が溶解する。僕は様々な世紀の気配を感じながら夜の街を歩き回る。

（のや　ふみあき）

ハバナ旧市街の大聖堂（野谷文昭画）

一九六八年の旅と二〇一四年のベルリン

浅野輝子

一九六八年の夏、冷戦の真っ只中、学生だった私は、横浜港からソ連船に乗ってナホトカ港へ渡り、シベリア鉄道でヨーロッパに旅した。出発の当日、母が私に「今から敵国に旅立つんだね」と言って目に涙を浮かべながら、船上からのテープを握りしめていたのを思い出す。モスクワ、プラハ、ウィーンを経てドイツへ入国したが、当時ドイツは東西に分断されており、私たちは西ドイツしか滞在許可が下りず、陸の孤島と化したベルリンには行くことが出来なかった。

旧東ベルリンサイドに残っている「壁」の前にて　2014年8月

あれから数十年が経ち、世界は様変わりして、東西ドイツは統一され、自由に移動できる国となった。二〇一四年八月、私は国際学会出席のため、ベルリンを訪れる機会を得た。かつてベルリンを東西に分断していた検問所であったチェックポイント・チャーリーは今や観光名所となり、多くの観光客が米兵に扮した人と写真を撮っていた。そして、壁博物館や旧東ドイツ側には今も色鮮やかなペイント画が描かれた壁の一部が残り、鉄筋がむき出しのまま残っている箇所もあって強い衝撃を受けた。また、スパイ博物館では当時のままの盗聴器などが展示してあり、当時の市民らの不安はいかばかりだったかと思いをはせた。

その後、一九六八年当時ロンドンにてホームステイした家族と会い、ベルリンの話をしたところ、なんと！　ホストファザーは一九五〇年代に二年間イギリス軍兵士としてベルリンに駐留した経験があるとのこと、しきりに懐かしがって、私が持参したベルリンの歴史を描いたパンフレットに見入っていた。若き日に訪れたドイツ（西ドイツ）と今回再訪したベルリン（旧東ドイツ）の町々は、それぞれ激動の世紀を経て新たに生まれ変わり、これからの世界を模索しているように感じた。

（あさの　てるこ）

パリ十三区

伊藤達也

「たゆたえども沈まず」という標語がラテン語でパリ市の紋章に刻まれている。十六世紀以来パリ市は船に喩えられ、時々大きな事件が起こって揺さぶられはするものの、そのうち揺れも収まり元に戻るというのだ。

パリ市の中央にはセーヌ河が流れているので、シテ島はまさに船のようだが、船とはいっても座礁したまま長い年月のうちに石で覆われた相当堅牢な船である。この街に空から降り注ぐ雨は、雨樋や大聖堂の怪獣（ガーゴイル）の石像の口から地上に落ち、敷石でびっしり埋め尽くされた街路のくぼんだ中央をつたい、土に浸み込むことなくセーヌ河と合流し、市外に流される。この街の人々の保守性や、時として人を人とも思わないような振る舞いとどこか重なる石の街。

留学を終えて帰国後、かつて通っていた大学がカルチエ・ラタンの五区から中華街と高層住宅群の十三区に移転したと知った。大学の新校舎にとパリ市があてがったのは、セーヌ河に面した巨大な元小麦粉工場の建物だった。何かの機会にキャンパスを訪れると、そびえ立つレンガ造りの橋柱やガラス張りのビル群に圧迫されながらも古本屋や安食堂がしぶとく営業する新たな界隈が出来始めていた。

マンハッタンとブルックリンを隔てるイースト・リヴァーを思わせる幅の広いセーヌ河に向かって歩きながら不意に、パリ市は体の大部分を水面下に沈めながら、その一部だけを水上に浮かべている巨大な恐竜で、忘れた頃に寝返りでも打つかのように姿勢を変える、というイメージが浮かんだ。恐竜がごろりと姿勢を変える度に住人達はそれまで住処にしていた背中だか脇腹だからあわてて避難し、新たに水面に現れた肩だか尻尾だか分からない場所に移動し、新しい界隈をこしらえる。

あの銃声とともに、恐竜は身をよじらせた。水中に落とされた住民達はこの街の立て直しを始めている。欠点の多いこの街に、今ずぶぬれの住民の一人として居られない事が、私にはなぜかとても寂しく思われるのだ。

（いとう　たつや）

わが故郷フェニックス市

ライアン・モリソン

米国西部のアリゾナ州は元々メキシコの一部であった。だが一九一二年に、現在の米国をなす五十州の四十八番目の州として併合された。その広大な自然は多様性に富み、砂漠地帯に赤茶色の岩山やサボテンもあれば雪の積もる森林にはスキー場もある。有名なグランド・キャニオンやセドナの風景は世界じゅうの観光者を魅了し、年々人気が高まっている。

自然が美しい反面、そこに暮らす人々はお世辞にも美しいとは言えない。多くは俗臭芬々たる人々である。十九世紀後半に押し寄せてきた白人開拓者は、この地に数千年前から自然と平和裡に共生していた原住民やメキシコ人を金と暴力を用いて排除した。奪った土地には、のちに西部劇に出てくるような無法地帯、いわゆるワイルド・ウエストを建設したのである。右翼嗜好のディストピア、文化的に不毛な暗黒郷とすら呼ぶことができる。そしてここに見られる精神（ガイスト）は現在も脈々と受け継がれているのである。

アリゾナ州では、銃を持つカウボーイを絶えず警戒しなければならない。特に九・一一以降、僕のように肌が褐色で豊かな髭を蓄えた人間は、テロリストと決めつけられがちなので、腰を低くしている必要がある。教育予算の少なさゆえ、アリゾナ州の公教育のレベルは低く、英語を正しく使える人が少ない。僕のようなコスモポリタンを趣味で狩る右翼が多く、肉体労働者として働くメキシコ系移民を奴隷扱いする人も少なくない。僕は五歳の頃からこの州を一刻も早く出たいと考えていた。

このように欠点だらけのアリゾナ州ではあるが、それでも年を重ねるにつれ、故郷に対する僕のノスタルジアは次第に強くなってきた。今はその様々な表情を持つ豊かな自然の美しさが偲ばれて仕方がない。僕の脳裏には、渇いた大地にサボテンの群生する風景が常に広がっている。そこで生まれることも、永住することも薦めることはできないが、短期ならば滞在する価値は大いにあると思う。矛盾するようだが、是非行ってみてほしい。

（もりそん　らいあん）

プラハ

諌早勇一

「黄金のプラハ」「百塔の街プラハ」――プラハを讃える言葉はいくつもある。でも、ヴルタヴァ川にかかる立像の並ぶカレル橋を渡り、丘の上のプラハ城を散策して、かつてカフカが住んでいたという黄金小路に迷い込んでも、それほどの感激はなかった。プラハが好きになったのは、プラハ城にそびえるゴシック建築"聖ヴィート大聖堂の威容を眺め、中に入ってムハ（フランス語読みではミュシャ）の描いたステンドグラスを見たときではなく、聖ヴィート大聖堂の壁面に無数の小鬼"ガーゴイル（樋嘴）を見つけたとき、（知人から教わった）市民会館のツアーにうまくもぐりこんで、「市長の間」の壁面と天井を飾る、フランスから帰国したムハの、スラブの歴史を題材にした壁画を眺めたときだった。

プラハという町はどちらかというと薄汚れた雰囲気（私がかつて専門にしていた亡命ロシア人作家ナボコフは、この町のイメージを「寒々とした川にかかった寒々とした橋、雨、どこかの礼拝所の濡れたガーゴイル」と結びつけている）で、観光ガイドに載っている黒ずんだ火薬塔や天文時計を眺めても、息を飲むほどの感慨は味わいにくい。この町が好きになるのは、きっとこの町に「自分のプラハ」を見つけたときなのだろう。町に残るユダヤ人街のいくつものシナゴーグをめぐった後、みやげ物屋で伝説のゴーレムの人形を見つけたとき、町の東部に広がる（ユダヤ人墓地で知られる）オルシャヌィ墓地の片隅に、小さなロシア教会を見つけ、今はもう忘れられた亡命ロシア人作家の苔むした墓を見つけたとき――そんなときこの町は忘れない町になった。近年この町も西欧化が進み、近代的なブチホテルもできたし、オルシャヌィ墓地のそばには巨大なショッピングモールもできた。それでもプラハは、その魅力を発見してくれる旅人を待ちつづけている。

（いさはや　ゆういち）

聖ヴィート大聖堂のガーゴイル

リスボンから地の果てへ

大岩昌子

子どものころ〈地の果て〉ということばが恐かった。〈世界の終わり〉を予感させたからだろう。大きくなるにつれ感傷的な気持ちは薄らぐが、実はこのことばを身を持って知る機会があった。数年前、ポルトガルの首都、リスボンで国際音声学会が開かれたときのことだ。

夏のリスボンは観光客でにぎわう。それでも、この古いヨーロッパの名残を留める街が、郷愁（サウダージ）を帯びた落ち着きを失うことはない。大学生のときにかじっただけのポルトガル語では不安だったが、要所でフランス語が通じたのは嬉しかった。この街は、隣のスペイン以上にフランスに好意を抱いている気がした。

リスボン観光の中心はベレン地区だろう。ヴァスコ・ダ・ガマをはじめ多くの探検家がここから出立している。なかでもひときわ目を惹くのが、マヌエル様式というポルトガル独特の建築・芸術様式で知られるジェロニモス修道院だ。だが、外観から内部に至るまで実に豪奢なこの建築物が、大航海時代に得られた富の結晶だと思うと、いささか複雑な気持ちにもなる。

学会が終わるとにわかに遠出がしたくなるのが人情だろう。まだ一度も広げていなかったガイドブックをパラパラめくる。シントラ。リスボンの隣にあり、宮殿やムーアの城跡が美しく、世界遺産にふさわしい景観を誇る。ケイジャーダはチーズタルト。写真を見て美味しそうだなと思った瞬間、〈ロカ岬〉という見出しが目に飛び込んできた。この岬はユーラシア大陸の最西端にあり、ポルトガルの大詩人、ルイス・デ・カモインスの叙事詩『ウズ・ルジアダス』のなかの一節、「ここに地終わり海始まる」を刻んだ石碑が建っているという。地の果てだ！　あのころの記憶が甦る。

次の日、私はこの石碑の前に立っていた。それでももう恐れを抱きはしなかった。大海原を望む景色は、詩人がうたった〈世界の終り〉ではなく、むしろ新たな〈世界の始まり〉を予感させたからである。

（おおいわ　しょうこ）

一九八八年旧正月の鳳凰

黄嫒玲

長沙で迎えた旧暦の除夜は、激しい爆竹の炸裂音と硝煙で戦争が起きたかと驚かされた。しかし、正月二日に着いた鳳凰の町は、殆ど音もせず、つつましやかな風情だった。家の前に、平たい丸餅がいっぱいに並べられたテーブルが置いてあったり、慣れない手つきで餅つきをする若者を見かけたりしただけだ。

鳳凰の古い街並み

三〇〇年前、中国全土を支配した満州族の王朝が抵抗する苗族を治めるために、漢族の軍隊をここに置いたのが、この町の歴史的な意義である。頑丈な作りの北の城門を出て、扇状に広がる高い階段を降りていくと、城壁の前の船着き場で沱江の静かな流れに女たちがさざなみをたてて洗濯をしている。飛び石に木の板を渡した橋で気軽に対岸に渡れるほどの川幅である。東門近くの橋げたの高い石橋の上に立つと、煉瓦を五メートルほど積み上げた高みに川にせり出すように建つ黒瓦木造の「吊脚楼」が軒を連ねる、この地方独特の住居風景を眼下に収めることができる。

私は作家沈従文の作品に魅せられて、彼の生れ故郷を訪ねたのである。作品ですでに馴染みになっている場所を「鳳凰古城遊覧図」を頼りに回った。地図にはなかった、私が知りたかった「道台衙門口」の場所も特定してみた。時折行き違う苗族の男女が大きな竹籠に野菜や赤ん坊などを入れて背負っているのが目を惹いた。沈従文の旧家は当時まだ整備されておらず、門を入った右手に小屋があり、そこに沈従文の弟嫁羅蘭さんが一人で住んでいた。色白の美しい顔立ちをし、私の質問に小さな声と優しい笑顔で答えてくれた。その間、私は、寒さをしのぐために壁一面に貼られた新聞紙を見て、沈従文の家族の境遇にかすかな悲しみを覚えた。

石畳の道を挟んで木の壁の民家が緩やかな曲線を描く鳳凰の古い街並みは、どこもかしこもぼろぼろで手入れがされていなかったが、夢のように美しかった。

（こう　あいれい）

ノールトバイクの記憶

真田郷史

私はその町の今を知らない。私の頭の中にあるのは、二十年以上も前の、もはや薄ぼんやりとした記憶でしかない。町の名は、ノールトバイク。小国オランダの北海に面した小さな町である。

ライデンの駅前から路線バスに揺られ、北西方面に小一時間も行けば、海岸近くのバス発着場に着く。北海沿岸のリゾート地と言うには余りにも鄙びているが、熱海を二回りほども小さくした感じだろうか。シーズン中は、北欧の短い夏を惜しむ海水浴客で、浜辺は溢れんばかり。海岸線と並行して走る道路の反対側は、お洒落なカフェやレストランが軒を連ね、海に向かって近代的なホテルやマンションが建ち並ぶ。そうかと思えば、辺りを散策すれば、リリパットレーンのモデルになりそうな古民家に、唐突に出くわしたりもする。

そんな町のとあるペンションを、防寒具代わりのスキーウェアに身を包んだ異様な風体の日本人一家が訪れたのは、一九九三年二月下旬のことであった。

家族の思惑はさておき、私自身の関心は別のところにあった。町の南に隣接するレインスブルフには、近世オランダの哲学者スピノザが、二十八歳から三十歳までの三年間を過ごした下宿屋が、今なお残されているのだ。この地で彼は日々レンズを磨きながら、処女作『神、人間、および人間の幸福に関する短論文』と『知性改善論』を書き上げた。ペンションからは五キロほどの距離である。

この辺りはまた、チューリップの大栽培地帯の南端に位置する。一面のチューリップ畑の中に家々が点在している、と言えるだろう。ただし、大地が赤や黄に塗りつぶされるのは一年のうちほんの僅かな期間だということは、覚えておく方が良い。観光用を別にすれば、球根を育てるために、開花間もなく花が刈り取られてしまうからである。有名なキューケンホフ公園へは、直線距離で八キロほどである。

海岸から離れるにつれ建物もまばらになり、一望できる畑の向こうには、遠く隣町の集落が教会の塔に守られるが如く眺められる。長閑な風景である。何だろう。ロハスな時間が流れている。オランダ人は生粋の合理主義者だと思う。それにも拘わらず、否、それだからなのか、オランダの空気は決してあくせくしていない。記憶の中のその町には、いつもゆったりとした時が流れている。私はその町の今を知らない。（さなだ　さとし）

ペンション裏手の畑より、
Noordwijk Binnen の集落を望む

ヴェルチェッリ

高田康成

日本語に大和言葉と漢語の別があるように、英語の語彙にも古来のゲルマン系統と外来のロマンス語系統の別がある。「贈物」に、ゲルマン系統では gift、ロマンス語系統では present といった具合。この二重構造は、史上名高い一〇六六年の「ノルマン人の征服」によってもたらされた。独語に近い（Old English=OE と学者の呼ぶ）言語を使っていたブリテン島は、仏語に近い言語をもつノルマン人に支配されるところとなり、その後紆余曲折を経て、現代英語の元になる「ハーフ」英語が産み落とされた。

ＯＥを読むなど、私の学生時代でさえ酔狂にもほどがあると言われたが、「労多くして益少なし」と断り書きのあるＯＥ入門書を紐解き、初歩読本をやっつけ、ＯＥ文学入門なる概説書も読んだ。ただなにしろ「労多くして益少なし」である、殆ど何も頭に残らない。唯一ＯＥの詩と散文を収める『ヴェルチェッリ写本』という名前だけが妙に記憶に残った。ＯＥ写本にもかかわらず、なぜ書名はイタリア語っぽい名称か？　この違和感のせいだろう。

遥か下って二〇一〇年の三月、トリノ大学古典学科の友人教授の招きに応じて、私は比較古典学の講義をしに出かけた。学部生が主だというので、予め英語の原稿をイタリア語に翻訳してもらい、それで講じるということになった。すると、ついでだから隣町の古典協会主催の公開講義で同じ話をしてくれということに。隣町はヴェルチェッリと耳にしたが、しかし俄かには気がつかなかった。それよりも、映画『にがい米』（一九四九年）の舞台だと聞くが早いか、セクシー女優で一世を風靡したシルヴァーナ・マンガノの姿がちらついてしまったからだ。

大聖堂宝物館講義室という、イタリアならではの豪華なお膳立てを得て、稚拙な講義を済ませると、自然な流れとして宝物館見物へと至る。写本だ。そこで一気に四十年ほど前の記憶が蘇った。この町は、英国からローマへ向かう巡礼の中継地に当たった。写本は巡礼者がもたらしたものらしい。

（たかだ　やすなり）

高尾

若山公威

バブルがはじけ、就職状況が厳しい年に電機メーカーに就職した。配属先は、東京の西端にある八王子の中でも、最も西にある高尾の事業所。毎朝、中央線を混雑とは逆向きに、高尾山へのハイキング客にまじって通勤していた。

職場では懇親のために運動会や夏祭りなどのイベントが行われていて、古き良き時代の家族的な雰囲気が残っていた。その一方で、能力主義という名の賃金抑制やリストラが始まっていた。解雇された元従業員が、毎朝のように会社の入口で、ギターを片手に会社への抗議の歌を歌っていた。配属後の研修で、会社員としての心得を教えてくれた総務課の人が、数か月後に会社を辞めて近所に飲み屋を開いたのには驚いた。社会人としての基礎を教えてくれた良い会社ではあったが、一生この会社にいるだろうという思いはなかった。厳しい就職活動を経験し、先行きが見えない中で、同期の連中も会社にしがみつくのではなく、とにかく社会人としていろいろなことを身に着けようとする勉強熱心な雰囲気が感じられた。バブル期に大量入社した先輩世代とは、意識に大きな差があることが良く分かった。

会社の敷地から出ると、東京とは思えないのどかな雰囲気で、東海地方から初めて外へ出た身としては心地よさを感じた。同期の中には、すぐ隣の相模原に家を買う者もいた。転職していなければ、自分も住み着いていたかもしれない。駅前は店も少なく寂しいくらいだったが、今でも思い出すのは駅前のラーメン屋だ。味も良かったが、それ以上に一緒に食べた職場の人たちのことが思い出される。結局、目と鼻の先にある高尾山には登らなかった。あの頃の自分にとって、高尾はあくまで仕事の場所だったから。

転職後は、八王子に行く用事があっても高尾は避けていた。そうこうしているうちに、高尾の事業所は閉鎖になってしまった。今度行ったら駅前でラーメンを食べて高尾山に登ろうと思う。

（わかやま　きみたけ）

ロサンゼルス　残酷でハードボイルドな街

蕎麦谷　茂

時差を気にしながら何回電話をしても呼び出し音が鳴り続けるだけだった。

当然、帰宅していてもいい頃なのに……。

幾日か、間隔をあけて国際電話をした。あの広い屋敷に電話が鳴り響いている。ひょっとしたらバックヤードのプールにいるのかもしれない。いや、そうだとしても……。

九回目の電話で受話器が上がり、小さく「ハロー」という女性の声が聞こえた。

「ヨーコさん?」

「ソバタニさん?」

「先週から何回も電話をしてたんだけど……」

「家を空けていたんです。今、ちょうど必要なものを取りに戻ったところで……」

「ダニエルは?」

一瞬、間が生じた。

「知らなかったの?　彼は死んだ」

「えっ」

「三週間になるかな。自殺したのよ」

ロサンゼルスは虚飾の街だ。目がくらむような強い光の中で家も車もエナメルのように輝いている。赤いハイビスカス、オレンジ色のストレリチア、紫色のジャカランダ、みんな造花に見える。敷き詰められた青々とした芝生でさえもコロラド川から引いた水をスプリンクラーで散布して、体裁を保っている。人の死さえ……安っぽい。ハリウッド映画の脇役のように次々とカメラのアングルから外れ、忘れ去られていく。

嘘だ!　ウィルシャー通りの南、閑寂な住宅街の奥まったところにあるスパニッシュ・ミッション様式の白い家、広い前庭とプールのあるバックヤード、ポルシェ・コンバーチブルと三匹のブルマスティフ、そしてライフルと拳銃のコレクション。グラハム・ジェームズ弁護士事務所の最年少パートナーで、某日本大手銀行米国法人の顧問弁護士という肩書、それにヨーコさんとママと。そうした築き上げ、愛情を注いできたものをすべて残して……。逝くか?

突然、九千キロ離れた受話器の向こうから排気ガスとブーゲンビリアの香りが混じったロサンゼルス特有の匂いがした。ロサンゼルス――「日の輝くだだっ広いやぼな街だ――けばけばしたくだらない雑然とした街だが、なんとなく楽しい。最後の幻覚。しだいにしぼんだ残り物――フィッツジェラルドはなんといったかな?――〈最後にして最大なる人間の夢〉。地の果てで土地はなくなり、夢は大洋に遮られ、まわりの人の声で目を覚ます所だ。ロサンゼルスは、灰の味を口に残して吐き出す煙草の吸殻だが、いろいろ欠点はあるにせよ、失敗しながらも温かみの残っている街だ*」そして残酷で、ハードボイルドな街なのだ。

*ロバート・B・パーカー『残酷な土地』菊池光訳、早川書房、一九八九年

（そばたに　しげる）

残酷でハードボイルドな街 ロサンゼルス

青島の水族館へ

鵜飼尚代

青島に行きたいと願うようになったのは、専ら『海洋天堂』（二〇一〇年　邦題『海の天国』）を観たことによる。かのジェット・リー（李連傑）が、身構えることも足を振り上げることもなく、余命幾ばくもない哀しい父親を演じた。その舞台が青島だった。というより青島の水族館だった。知的障害があり自閉症を患う一人息子は、父親が働く水族館で魚とともに泳ぐことを喜びとしている。泳いでいるとき、父親の助けがなければ人並みの生活が送れない、人としてのギコチナサなど微塵もない。魚とともに生きるような自然さがある。哀しい父親は、自分の死後、息子が孤独に苛まれないよう、海亀こそ父だと息子に思い込ませようと悪戦苦闘する。奇跡など起こるべくもなく父親は消えたが、あとには不器用ながら明るく生きる息子がいた。時に海亀とともに泳ぐのを楽しみにして。

小賢しい知恵とは無縁の息子が、魚とともに泳ぐ姿がとにかく美しかった。風景として自然の中に収まるのではなく、営為として自然に組み込まれている気がする。ある意味で「無為自然」の境地なのではないか。青島にはそんな「自然」があるような気がしたのだった。

青島の新市街地は幅の広い道路の両側に高層ビルが建ち並ぶ、最近の中国によくある町だ。しかし、さすがに旧市街地には古いシンプルな教会などもあり、ドイツの香が残る。映画の中で父子が住んでいた辺りには旧市街の香がしていた。

さてさて、水族館はどこにあるのか……あった、あった、海岸沿いに。日本の水族館同様、観客を海中にいるような気にさせる見せ方をしている。ここに彼の息子が泳いでいたなら、その泳ぎぶりに見入っているうち私も仲間入りした気分になるのではないか……などという甘い空想は打ち砕かれた。私たちはウォーキングベルトに乗せられ、移動速度もコントロールされて、まさに科学の力（有為）で「人造自然」を鑑賞するしかなかったのだ。

（うかい　なおよ）

ドイツ、ミュンヘン

奥田隆男

紅葉か。広島の「紅葉まんじゅう」ではない。おいしいし、私も嫌いではない。だがその話ではない。色だ。

ドイツのミュンヘンに行ったことがある。市立美術館「レンバッハハウス」に入った。二十世紀初頭、ミュンヘンで活躍した「青騎士」グループの作品がある。カンディンスキーの絵があった。抽象絵画の祖といわれているが、なんだこれはまるで千夜一夜の世界だ。モスクワ、クレムリンを背景に、月夜、若いカップルが幸せそうにロバ（だったと思う）に乗っている。こんなロマンチックな絵を描いていた画家があの抽象絵画に行き着いた訳か。フランツ・マルク、「青騎士」のリーダーの絵がある。彼は第一次世界大戦で戦死している。粛然とする。二階に上がり、見て回る。もう終わりだ、一階に降りる階段が見えている。

と、動けなくなった。階段の手前、ほんの小さな絵だった。パウル・クレーの「植物園」。色から目を離せなくなった。何色だろう。朱ではない。赤でもない。えんじ？　そうかもしれない。でも一色ではない。えんじの色を基調にしているのだろうが、微妙なニュアンスが一杯詰まっていて、奥行きがある。見れば見るほど、幸福感に浸される。鈍感極まりない私が、この色を前にして動けなくなっている。こんな色が描けるなんて。顔面の半分が眼ではないかと思われるほど大きな眼をしていたクレーはいったいどんな色を見ていたのか。

なぜこんなに魅入られるのだろう。日本での紅葉の経験か。葉一枚一枚、一つとして同じ色はない。でも、秋の寂しさと、この色を見ることができる幸福とを共に感じさせてくれる。だから、あれは紅葉の色か？　しかし、植物園は明らかに亜熱帯の雰囲気だった。などと思いながら外に出た。初秋なのに寒い。で、屋台の焼きソーセージを食べた。おいしかったこと。ああ、結局、食べ物の話になってしまった。

（おくだ　たかお）

ペトラ

佐藤都喜子

夕日が静かに山の峰々に沈んでいく。この夕日を眺めているのは、私ともう一人の日本人、それにロバ引きの老人の三人だけ。

ここは世界遺産で有名なヨルダンの「ペトラ」だ。谷の地形を利用した自然要塞となっており、ペトラの玄関口となる大神殿に至るまでの入り口は狭く、奥深くまで入り組んでいる。歩くことにうんざりした頃に急に視界が開け、眼前にみごとな大神殿が現れる。そこからは今度は抜けるような青空と平坦な白い砂道が続き、谷間と大神殿から広がる平地のコントラストからは重厚な立体感が醸し出されている。平坦な道が終わると、次は第二神殿への山道となる。

ヨルダンに居住していた頃、私は、日本からの訪問客をペトラに連れて行った。普段は時間の制約上、有名な大神殿を見て終わりとなるが、その日に限って、ロバに乗って第二神殿のある岩山の頂上までたどりつき、夕日を眺めた。

夕日が沈んだとたんに、あたりは何も見えなくなった。老人の「心配するな」という声が聞こえ、この老人にすべてを託すしかないと思った。谷間に差し込むわずかばかりの月の光をたよりに、来た時と同じようにロバに乗って細い崖路を降りる。落ちたら崖の下に真っ逆さまである。生と死の狭間にいるような気分だったが、とにかくロバにしがみつくしかない。

突然、老人が陽気にしゃべり出した。「おれはベドウィン（遊牧民）さ。夜歩きは得意だから心配するな。昔は山羊や羊を連れて、家族とペトラの洞穴に住んでいたんだが、政府がペトラの横のワディ・ムサに家を用意してくれたんで、仕方なくそこに住むようになったんだ。それからは山羊や羊を飼うのではなく、ペトラの観光案内をしている。さすがにこの仕事にも慣れたよ」とのこと。

私にとってペトラは文化遺産だ。しかし、ベドウィンにとってペトラは生活する場所だったのだ。すると、ペトラが突然人間のにおいがする今を生きる町に見えてきた。

（さとう　ときこ）

ペトラ近郊の風景

読谷・残波岬で海風に吹かれながら走る

山内　進

沖縄県中部にある読谷村。東シナ海に臨む西海岸に突き出た岬が残波岬だ。海からの風が絶えることがなく、鋭く尖った黒い琉球石灰岩で覆われた岬の先端には、白く輝く灯台が紺碧の海を従えるかのごとく、眩しく輝いている。北の方に目を転ずると、かつて緑の芝生に覆われた広場に万人が座れたという故事に由来する万座毛や、半世紀も前に海洋博覧会が開かれ、今でも多くの観光客が訪れる本部半島の山々、更に海を隔てた左手の方にはタッチューと呼ばれる小高い丘の姿が美しい伊江島の島影などが目に飛び込んでくる。

岬へと続く道の入口付近には周辺の田園風景にもすっかり馴染んでしまったリゾートホテルが建ち、海岸線や道路も整備され、綺麗になったビーチや公園には年中人の絶えることがない。数年前には五キロぐらいのジョギングコースもできて、観光客や地元の人達に喜ばれている。読谷に「帰る」機会があれば、残波岬に行きたくなるし、残波岬に行くのはそこでジョギングを楽しむためである。

ジョギングのスタートは、琉球王朝時代に長浜港を拠点とした中国との海洋貿易・交流の先駆者となった泰期のモニュメントが雄々しく建っている地点からだ。湿気を含んだ海風に吹かれながらのモーニング・ジョグも水平線にゆっくりと沈んでいく夕陽を楽しみながら心地よい汗を流すイブニング・ランも最高だ。芝生の向こうに広がる海原を眺め、甘い香りがかすかに漂うアダンの樹々の間を抜け、近くの公園から聞こえてくる子どもたちの笑い声を耳にしながら、僕はゆっくりと走る。走りながら考える。

走ることについて語るとき、僕が語りたいのは、走りながら考えることについてである。残波岬で走っている時は、やはりここが自分の帰るべき場所であり、自分の原点であるということに思い至ってしまう。岬近辺の様子はすっかり変わってしまったけれど、ここ読谷村は僕が生まれ育った場所であり、多くの知人・友人が住む場所であり、そして先人たちの歴史があり更に新しい歴史がつくられていく場所なのである。そんなこんなに思いを馳せながらいつまでも温かい日差しを注ぐ南国の太陽のもと、僕はジョギングを楽しんでいる。読谷。ここが僕にとっての「わが町」である。

（やまうち　すすむ）

メンフィス、テネシー

梅垣昌子

ひっくり返された宝石箱としての異国の街の夜景は、恋人たちだけでなく旅人をも程よく疎外する。疎外された心は「いま、ここ」の束縛から解き放たれ、居ながらにして時空間を自由に彷徨い始める。そんな孤独の心を包み込むのが、このメンフィスの街。

上空から眺めた街の煌めきを脳裏に焼きつけたまま、飛行機で降り立つテネシー州の国際空港は、アメリカ南部への玄関口だ。車で走ること約十五分、メンフィス市の中心部を東西に走るビールストリートは極彩色のネオンで縁取られ、地上のおもちゃ箱が脳裏の映像を強烈に上書きする。一九二〇年代の禁酒法の時代、バイブルベルトに暮らす敬虔なクリスチャンにとって、ここは密造酒や賭博のイメージと結びついた背徳の街だった。しかし三十年経つと、"City of Good Abode"（住みよい街）という合言葉が定着し始める。州最大の商業都市への発展は、ミシシッピ川東岸のこの街の暗部を幾分漂白したようだ。沿道のライブハウスから次々と通りに戻ってくる観光客の群れが、薄められた闇の中で、八雲の「むじな」の集団になる。

太陽が昇る。大河に臨む「チカソー崖」を探す。北米大陸の水運の大動脈を「発見」したエルナンド・デ・ソトの名がつく橋の方へ向かう。まだ時差に適応できない頭を疲れた足が裏切った。あるいは昨夜ビールストリートですれ違った亡霊が、昼間の闇に旅人を連れ戻そうとしたのかもしれない。逆方向へ歩いてしまった足は、ロレインモーテルの前で凍りつく。半世紀前の弾道を耳元に感じる。三〇六号室の宿泊客、マーチン・ルーサー・キングの暗殺現場だ。耳の奥に響き始める追悼のゴスペルは、ビールストリートに充満するブルースの唸りを手繰り寄せ、もう一人のメンフィスのキングを思い起こさせる。九十歳を目前にして鬼籍に入ったばかりのブルース・ボーイことB・B・キング。彼の背後には名も無い無数の歌い手達の声と祈りが幾重にも折り畳まれている。

まさに異国の街は記憶の霊廟だ。太古以来この空間を闊歩した人間たちの心の汗が、通りのあちこちで揮発している。彷徨の末に見失いそうになっていた目的を思い出した。ヨクナパトーファ会議が明日から始まる。ディープ・サウスへ向けて出発だ。

（うめがき　まさこ）

イリエ＝コンブレーの思い出

林　良児

あれは一九八七年のことだから、すでに二十八年余の月日が流れている。当時学外研究でパリにいた私は、その年の五月にプルーストゆかりの地を訪ねることにした。マドレーヌを浸した一杯の紅茶のなかから過去のすべてが出てきたというあの無意志的記憶の物語にかかわる土地をいつかは自らの目で確かめてみたいと思っていたからだった。

十六世紀以来、プルーストの父方の家族が住んでいたイリエというその小さな町は、『失われた時を求めて』の第一篇『スワン家の方へ』の舞台として「コンブレー」の名のもとに描かれている。この小説が二十世紀最大の文学事象といわれるまでに評価されるにつれて、イリエは脚光を浴び、一九七一年のプルースト生誕一〇〇周年を機に正式にイリエ＝コンブレーと改名された。

イリエ＝コンブレーは、パリの南西およそ一二〇キロのところに位置する。私はパリから西に向かう高速列車に乗った。小一時間でシャルトルに着く。ローカル線に乗り換えて三十分もすると目的地である。ひなびた趣の駅で、ホームがとても低い。駅前の食堂で軽くランチを済ませてからタクシーで町はずれのホテルに向かった。樹木に囲まれた二階建ての小さなホテルだった。夕食までにはまだ間があったので、私はすこし辺りを歩いてみた。「モンジューヴァン」と書かれた道標が目にとまった。ふと物語のなかに迷いこんだような錯覚に囚われた。午後の日差しを受けて眼前に広がる青々とした野は、そこがまさにボース平原の一隅であることを示していた。私は「コンブレー」の痕跡をさがした。

しかし、絶えず舞っている風、西日が木陰に織りなすしなやかな金色の絹目模様、麦畑のかなたに見える素朴な鐘塔、驟雨のあとで金色の光のなかに浮かび上がるはるか遠景の村、そのようなプルーストの描く風景が見えてくることはなかった。「コンブレー」の風景は、あくまでも『失われた時を求めて』の世界にとどまったままだった。

（はやし　りょうじ）

イリエ＝コンブレーの教会

長崎市　夕陽が丘そとめ

近藤有美

長崎市街地から国道二〇二号を通り、西彼杵半島を北上すると、二十五キロほどで夕陽の絶景ポイントに出る。そこにある道の駅には「夕陽が丘そとめ」という名がついている。長崎を訪れたことがある人は多いだろうが、ここまで足を伸ばしたことのある人はまだそう多くないのではなかろうか。海岸の長さ四一三七キロは、北海道のそれを抜いて全国第一位である。そのため、長崎ではいたるところで海に沈む夕陽が見られるが、私はここそとめから見られる夕陽が長崎一、いや、日本一だと思っている。ここからの夕陽が特別に思えるのは、この地の歴史を知ったからかもしれない。

ここそとめは、遠藤周作の『沈黙』の舞台となった場所でもある。作品には、江戸時代、キリスト教への厳しい弾圧を受け、苦しむキリシタンたちの姿が描かれている。キリシタンたちの苦悩は信仰か棄教かというものだけではなく、「あなたのために私は何をすべきか（何ができるのか）」という他者を思うが故の苦しみのように私には感じられた。

作品の舞台という縁から、ここそとめに、遠藤周作記念館が建てられたのだという。記念館からさらに北へ少し進むと、「沈黙の碑」に出る。

「人間がこんなに哀しいのに主よ海があまりに碧いのです」

碑に書かれているこのことばは、小説『沈黙』の中には出てくるものではない。この意味を知りたくて、もう一度『沈黙』を読んでみた。なるほど、そういうことを遠藤氏は伝えたかったのか。

（こんどう　ゆみ）

写真は、遠藤周作記念館から撮影したものである。ここには何度も訪れていて、海に沈む夕日を幾度となく見ているが、その写真がないのが不思議である。夕日の美しさに、いつも写真を撮るのを忘れてしまっていたようだ……

モスクワ、文学と酔いどれの……

亀山郁夫

国家崩壊から三年経た一九九四年から翌年にかけて一年間、モスクワに暮らした。研修先は、科学アカデミー付属の世界文学研究所。私はそこで、革命期の詩人マヤコフスキーの全集編纂作業にオブザーバーとして参加した。全三十巻による刊行を予定しているとのことで、毎週水曜日がその作業日に当てられていた。アパートは、都心の地下鉄駅まで五分という至便の場所にあった。少し無理をすれば、ボリショイ劇場やトレチャコフ美術館へも徒歩で行ける距離である。七〇平米ほどある一ＬＤＫの家賃が、二五〇ドル。破格の安さだった。一時は一ドル四〇〇〇ルーブルにまで下落した超インフレの時代で、アカデミーの所員には、一〇〇ドルの月給もまともには支払われていなかったという。そんな彼らを哀れに思い、何かしら口実をもうけては、大宴会を催した。一種の慈善事業である（笑）。料理の準備にみっちり二日をかけ、三、四ダースのハイネッケンとワイン数本を用意した。ウオッカはむろん所員たちの持ち寄りである。十五分ごとに切れ目なくつづく乾杯の小話が曲者で、泥酔した頭に話の勘所はほとんど理解できず、周囲の笑いに合わせるだけだった。楽しみは、詩人や作家たちの裏話だが、そんな大事な情報も、二日酔いの苦しみのなかできれいさっぱり忘れ去られた。ただ、今もって時々思い出す言葉が一つだけある。

「ウオッカがいちばんうまいのは、詩と収容所の話をしているときだ」。

思うに、所員たちはみな国家崩壊の犠牲者だった。それでも彼らの心には、文学への思いが熱く息づいていた。スターリン時代に劣らぬ悲惨とストレスを生き延びる道はそこにしかなかったのだろう。やがて世紀が変わり、原油価格が高騰しはじめるなか、街の光景は大きく変化しはじめる。エルメスやディオールの巨大な広告が立ち並ぶ都心はもう、私の愛するモスクワとは無縁だった。物欲に目覚めたロシア人は、私の知るロシア人ではなかった。私は今もって心のなかで愚直な問いを反復している。ロシアから文学を引いたら何が残るのか、と。あれから二十二年、マヤコフスキー全集は今もって一巻も刊行されていないと聞く。

（かめやま　いくお）

La représentation du Grand Berlin dans le cinéma expressionniste allemand

Yannick Deplaedt

Pour moi, la ville se doit d'être vue sous le prisme de sa création et l'histoire du cinéma a montré que les architectes n'étaient pas forcément les plus talentueux faiseurs d'espaces urbains.

Frank Kessler, professeur de l'université d'Utrecht, alors qu'il aborde la question passionnante du cinéma expressionniste allemand, explique que « quand les théoriciens et techniciens de cinéma allemands parlent d'expressionnisme, ils évoquent une conception de l'image de film entendue à la fois comme composition picturale et comme construction architecturale visant à créer un effet global unifiant la situation dramatique, l'atmosphère et le jeu des acteurs en un tout homogène ».

La ville devient donc plus qu'un assemblage de constructions urbaines, avec ses lignes de fuite, ses reliefs, ses hauteurs et ses volumes divers. Elle se transforme en objet d'art qui rappelle le travail d'un artiste peintre pris dans le jeu des circonvolutions esthétiques et architecturales.

Définition fidèle et incroyablement poétique du travail des décorateurs du cinéma de Robert Wiene, Paul Wegener ou de Friedrich Wilhelm Murnau, la langue allemande emploie le mot Filmarchitekte, que l'on peut traduire littéralement par « architectes du cinéma ».

Cette expression, inexistante dans d'autres langues, crée un lien précis et irréfutable entre la création de l'urbain et la mise en images des récits imaginaires des grands auteurs de cette époque. La ville devient le lieu de l'expression humaine, miroir déformant et déformé de ce que ressentent les personnages, dans leur folie et leur noirceur. Elle supplante les dialogues et les regards en devenant un ensemble d'espaces dramatiques vecteurs d'ambiances névrosées ou tragiques.

Elle est fixée sur du carton-pâte, obligeant les réalisateurs à tourner en studio, et révèle des ruelles enchevêtrées, labyrinthiques, que seuls les êtres les plus divergents semblent maîtriser parfaitement. Les victimes s'y perdent et parviennent rarement à fuir le drame monstrueux qui les poursuit, qu'il s'agisse de Cesare ou Nosferatu.

Tout y est désormais biscornu, la perspective y est faussée, les lignes obliques donnent le vertige et il est impossible pour les innocents ou les spectateurs de se soustraire à l'impression de malaise que ces décors font ressentir.

Loin de notre représentation habituelle, cette ville-Moloch est là pour broyer les pauvres égarés qui s'y retrouvent la nuit, alors qu'au silence répondent des constructions qui mentent et harcèlent, menacent et rendent fébriles les hommes.

Le cinéma expressionniste allemand laisse transparaître, comme une atmosphère qui s'extirpe de ses maisons de guingois, toute l'inquiétude de l'Allemagne après la Première guerre mondiale. La ville y devient l'expression des traumatismes qui hantent la nation et ses citoyens. Cesare (manipulé par le docteur Caligari) et Nosferatu, cachés dans l'ombre comme les enfants légitimes de ce monde en trompe-l'œil, endossent le rôle de ses représentants les plus effrayants.

Et pourtant, aussi menaçante soit-elle, les nuits urbaines que ces décors ont créées restent parmi les plus belles réussites du cinéma mondial. La ville y est définie comme le personnage le plus important du récit, et surtout, semble respirer et être faite d'émotions comme si elle s'avérait plus humaine que les monstres qu'elle a engendrés.

（ドゥプラド　ヤニック）